「Profes sional」Tennis

JPTA 能登国際女子オープンテニス2011

「女子プロの意地と意地のぶつかり合い」。5回目を迎えた『JPTA 能登国際女子オープンテニス』は9月4日から11日までの8日間、能都健民テニスコートで開催された。

「25,000ドルの大会とは思えない」と選手やコーチらが驚くほど、能登国際は毎回注目選手が集まり、好試合が多い。前週の「セキショウ国際女子オープン（茨城県）」で優勝した元日本代表の中村藍子を始め、昨年のウインブルドンジュニアで準優勝した石津幸恵など、今年も世界各国から77人の女子プロが参戦。予選から白熱した試合が展開された。

シングルス優勝はタマリン・ヘンドラー（ベルギー）。決勝戦では、中村藍子やシード選手を次々と破って勢いにのる19歳、江口実沙との激しいラリーを制した。

最後まであきらめない、絶対に手を抜かない見応えある試合はまさにプロフェッショナル。テニスの歴史と文化があるここ能登町で、県内外から訪れた多くの観客を魅了した。

江口との撃ち合いを制して優勝したタマリン・ヘンドラー（ベルギー）も19歳。優勝インタビューでは「能登での優勝は生涯忘れられない思い出になる」とコメント。能登をきっかけに世界へ駆け上がる。

2

3

4

1

1＿ダブルスで優勝した久見香奈恵とウォンテンチャイ・ワラチャヤ（タイ）。
2＿本大会第1シードの瀬間詠里花。2回戦で中村藍子に惜敗した。
3＿昨年に続いて出場した石津幸恵。順調に勝ち上がるが、シングルス・ダブルスともに3回戦で涙をのんだ。
4＿フェドカップ元日本代表の中村藍子。けがのためランキングは落ちているが、セキショウオープンで復活の優勝。自己最高世界ランク47位の実力は一見の価値があった。

シングルス準優勝の江口実沙。第1回大会（当時15歳）から数えて4度目の出場。5月の軽井沢オープン（25,000ドル）で優勝し、ランキング急上昇中。今後世界での活躍が期待される注目の若手選手。

能登国際女子オープンテニス 5年目の「進化」と「真価」

能登町と日本プロテニス協会（ＪＰＴＡ）が、これまで二人三脚で築きあげてきた大会。5回目の大会を終えた佐藤直子理事長と持木一茂町長に5年目の「進化」と「真価」を聞いた。

—今大会を振り返って。

佐藤　今年の大会も、すばらしい選手が集まってくれて1回戦から良い試合がありました。ダブルスの決勝は手に汗握る展開でしたし、シングルスの決勝も迫力ある打ち合いでした。お客さんからは「今までで一番盛り上がった決勝でしたね」と言われるほど、すばらしい決勝戦だったと思います。力のぶつかり合い、そして決してあきらめない試合を、石川県のジュニアにも見せられたことはすばらしいことだと思っています。

本戦では、アクセントとなる試合がいくつもありました。第一シードの瀬間選手と元全日本の中村選手のお互いゆずれない試合、石津選手と最年少プロ辻選手の試合など、本当に良いトーナメントでした。

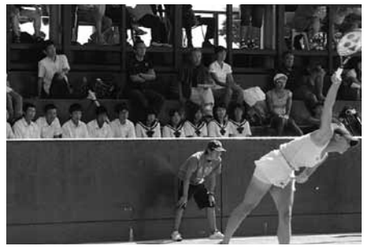
今年は、ユーストリームを使ってインターネットで全世界へ配信もしました。今年の内容であれば、自信を持って配信できる内容だったと思います。

天候に恵まれたことも良かったですね。どれだけ受入体制がすばらしくても、雨が降るとどうしても選手たちはがっかりしてしまいます。そういった意味でも、今年は選手みんながすごく良い印象を持って帰ってくれたと思います。

リピーターの選手・コーチも増えてきて、今年は釣りざおを持ってくるコーチもいたそうです。自分たちで能登を楽しんでくれていることも、運営側としてはうれしいですね。

持木　今年は公務が重なり、あまり試合を見られなくて残念でしたが、5回目の大会にふさわしい熱戦が繰り広げられたと聞いて、うれしく思っています。能登国際は徐々に知名度も上がって、選手たちにとっては世界への登竜門的大会になりつつあります。大会の知名度を上げることで選手は来てくれます。私たちとしては、選手が気持ちよく試合ができる環境、体制をさらに充実させていかなければならないと考えています。

佐藤　選手やコーチからは「この大会は2万5千ドルの大会とは思えない」と良く言われます。それだけの選手が能登に来てくれて、試合をしてくれることはすごいことだと思います。



江口選手と中村選手の準々決勝を観戦する鵜川中学校の生徒。

観戦に訪れた宇出津小学校児童が「やってみんかいね」に挑戦。

決勝戦は県内外から多くの観戦客が訪れ、選手にエールを送った。

5年続けてきたことで、能登国際のスタイルが確立できた。

日本プロテニス協会（JPTA）
佐藤直子理事長

—5年間継続してきたことは。

持木　1回目の大会と比べると、本当に良い大会になっていることが実感できます。前回の反省をしっかりして、次の大会に生かしてきたからこその進化だと思います。スタッフ、ボランティアの皆さんが本当に頑張ってくれて、大会を支えてくれていることに感謝しています。

佐藤　今年は夜11時まで試合をした日もありました。スタッフやボランティアの皆さんは大変だったと思いますが、最後はスタッフ間のコミュニケーションも取れて、一丸となって運営できたと思います。かなり年配の方にもボールボーイやラインパーソンをやってもらいました。心配していましたがパーフェクトにこなしてくれて、本当にありがたかったですね。

5回続けてきて、能登国際のスタイルが確立してきたように思います。前回レッスン会に来てくれた富山県の人が、今年は友達を連れて、グループで来てくれていました。大会期間中にやっていること、イベントの内容が分かってきてくれています。これも続けてきた効果だと思います。

今年も全国のグルメが集合。めずらしいＢ級グルメに選手も観客も行列を作る。

決勝戦当日は石川県ジュニアの強化練習も行われた。

ウエルカムパーティーでは久田町議会議長の発声で乾杯。

—テニスの町づくりについては。

持木　かつてはソフトテニスだけという感じでしたが、神和住純さんや能登国際がきっかけで、ソフトテニス、硬式テニスにこだわらずに、テニス全般を通してのまちづくりが可能になったと思っています。これからは硬式テニスの合宿なども積極的に誘致していきたいと考えています。

佐藤　能登国際では、大会イベントの一つとして全日本クラスのソフトテニス選手を招いて、能登の子どもたちに指導してもらっています。この大会が、能登町のソフトテニスのレベルアップ、そしてテニスのまちづくりにつながってほしいと思っています。

—課題や今後の豊富は。

持木　町としては、一人でも多くの町民の皆さんに観戦してもらい大会を盛り上げたい。平日は難しくても、土日のダブルス・シングルスの決勝はできるだけ観戦に来ていただけるよう呼びかけたいと思います。観客動員も含めて、年々良くなっている右肩上がりの状態であり、続けることも必要だと考えています。能登国際のファンを増やし、たくさんの人に来ていただくことが、大会の存続につながっていくのではないでしょうか。

佐藤　私は金沢近郊からもっと人を呼びたいし、呼ばなければと思っています。一度足を運んで試合を見てもらえれば絶対にまた来てもらえます。続けていくことでリピーターを増やして、藤波運動公園の駐車場をいっぱいにすることが夢です。

私は年々、能登町民になったような気持ちが強くなっています。また来年も能登に帰ってきたい。そして、さらに良いトーナメントを開催したいと願っています。

能登国際のファンを増やすことが、大会の存続につながる。

持木一茂能登町長